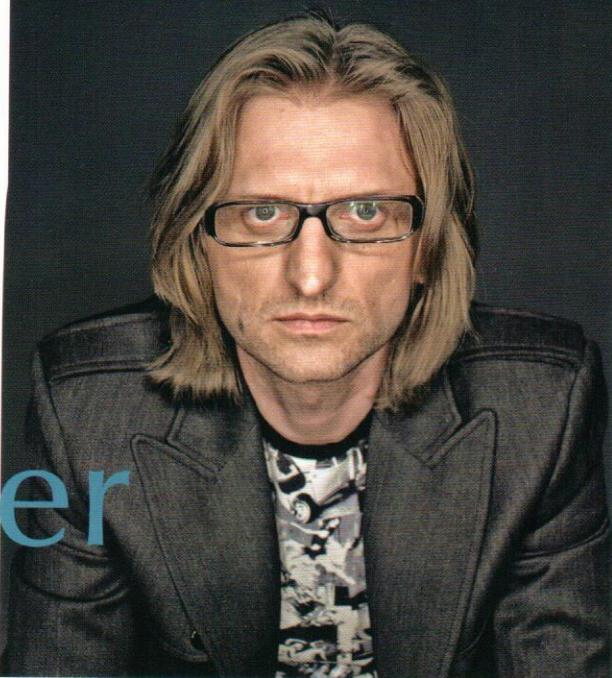


Leszek Moźdżer

レシェク・モジジェル インタビュー

[インタビュー・文] 杉田宏樹

Interview & Text by Hiroki Sugita Photo courtesy of Sylwia Kicka



——初めてショパンを演奏したのはいつですか？

LM 10代にショパンを基本とした学校の授業で弾いたのが最初です。彼は国民的な作曲家なので、子供の頃から聴いていました。ワルシャワで開催される〈ショパン国際ピアノ・コンクール〉は世界的に有名ですし、私たちポーランドの国民にとっては、とても人気が高いのです。

——当時好きだったショパンの楽曲は？

LM どの曲も好きですが、特に「ピアノ・ソナタ」や「スケルツォ」のような大作が好きです。

——ショパンの作品の魅力は何でしょうか？

LM メロディとハーモニーに関して驚くほど豊かな想像力が備わっていて、弾いてみればさらに美しさを感じることができます。また彼自身が素晴らしいピアニストであり、人間の手の筋肉の構造を意識して作曲をしていました。彼の音楽を聞くことはメロディとハーモニーばかりでなく、身体の動きを意識することにもなります。自分の身体とよくコミュニケーションをする必要があるのです。面白いですよね。ピアニストにとってはとても演奏のし

がいがある音楽なのです。

——ショパンをジャズで演奏しようと思ったのはいつ、どのようなきっかけでしたか？

LM 20歳の時にプロデューサーから

電話を受けました。ショパンの音楽をジャズで演奏できるミュージシャンを探しているとのこと。私は少し驚きました。ショパンといえば私が音楽アカデミーで学んだ作曲家ですし、そのような形で関わることに抵抗がありました。

——他のボーランド人ピアニストのアンジェイ・ヤゴデンスキがトリオの、クシシトフ・ヘルゼンがクインティトのショパン集を発表しているのに対して、あなたの2枚はソロが中心です。

——その後に2枚のショパン曲集が発表されます。

LM 自分で企画を立て、『Chopin Impresje』(94年、Polonia) を制作。その後フランスのレーベル・プロデューサーから電話をもらって、同じ選曲での制作を依頼されました。しかしすでに同作から数年が経っていたし、私自身が成長してステージも変化していたので、同じものを作りたいとは思いませんでした。そこで2枚目の『Chopin Demain - Impressions』(99年、Opus 111) は、1枚目をベースに

しながら、同作では演奏しなかった楽曲も選びました。

——他にショパンの名がついたアルバム『Impressions On Chopin』(Naïve)もありますが。

LM 2枚目を制作した後、フランスのプロデューサーが音源を他者と共有し始めたため、複数のレーベルから同一音源を編集した異なるアルバム名のCDがリリースされているのが事実です。『Impressions On Chopin』もそのような1枚です。

——他のボーランド人ピアニストのアンジェイ・ヤゴデンスキがトリオの、クシシトフ・ヘルゼンがクインティトのショパン集を発表しているのに対して、あなたの2枚はソロが中心です。

LM ソロ・ピアノはショパンの演目の一つかつでした。ショパンはピアノとオーケストラのために2曲書きましたが、多くの作品はソロ・ピアノでした。私が自分のアルバムでソロを中心にしたのは、ショパンの行き方を踏まえていました。ソロこそがショパンの音楽の典型を示しているからです。

——2枚のショパン集を出した後も、定期的にショパンにフォーカスしたコンサートを続けてきたのですか？

アルバムでソロを中心としたのは、ソロこそがショパンの音楽の典型を示しているからです



Leszek Moźdżer
(レシェク・モジジェル)

1971年ポーランド・グダニスク生まれ。18歳でジャズに傾倒。スピニエフ・ナミスオフスキ・カルテットのレギュラーを皮切りに、トマシュー・スタンコ、バット・メセニーラと共に。クシシトフ・コメダ賞等、受賞歴多数。



LESZEK MOŹDŻER
Chopin Impresje
Polonia / 2010

LESZEK MOŹDŻER
Komeda
ACT / 2011

MOŹDŻER DANIELSSON
FRESCO
Polska
ACT / 2013

LESZEK MOŹDŻER &
FRIENDS
Jazz at Berlin Philharmonic III
ACT / 2015

サートのために私の2枚目のショパン・アルバムにパーカッション奏者がゲスト参加していたことを踏まえて、フレスコを起用。現地へ行って初めて知られたので驚きましたが、彼はとても友好的で、リハーサルを通じて共演者である必然性を感じました。私が持った最良のバンドの一つだと思っています。

——2014年録音の最新作『Jazz at Berlin Philharmonic III』は同トリオに弦楽四重奏が加わった編成です。

LM このシリーズはジギが2012年にベルリンへ移住して、オーケションで購入したアルフレッド・ブレンデルのピアノを寄贈したことから始まりました。私はイーロ・ランタラ、ミヒヤエル・ヴォルニーと共演した第1弾に出演しています。コンサートとCDが成功したので、シリーズが継続されました。この第3弾はボーランドのアトム・ストリング・カルテットを招いたもの。デュオ、トリオ等の多彩な内容になりました。

——ACTでの次作について教えてください。

LM 準備をしています。ソロ・ピアノになるでしょう。すでに作曲を始めていて、少し個人的な録音もしています。アルバム・コンセプトはまだ明確ではありませんが、この方向性は確定しています。自分自身の体調と相談しながら、新しい作品を完成させたいと考えています。 **JP**

LM それほど頻繁ではありません。数年に1度、プロモーターから声が掛かってライヴを行う程度です。私はショパンが書いた原曲を尊重していて、大きく手を加えるのはあまり好きではないです。即興で演奏する時は、できるだけシンプルに仕上げることが重要。楽曲自体に多くの香りが含まれているからです。今回「Chopin - Classic go Jazz」と題した東京公演を行った(2016年3月@丸の内コットンクラブ)のは、この素晴らしい都市で演奏することを嬉しく思って、提案を受けたのです。

——ACTとはいつ何がきっかけで契約したのですか？

LM プロデューサーのジギ・ロッホは何度か私をレーベルに誘ってくれましたが、断っていました。レーベルの言いなりになるのが嫌だったからです。例えば毎年、新作を発売する、といった義務がありがちですが、アルバム制作に関してジギは「アイディアが生まれて、制作したい気持ちになった時にそうすればいい」と言ってくれました。だからACTとはとても良い関係を築いています。

——ACTでの初リーダー作の前に、ラーシュ・ダニエルソンとの2枚のACT共演作がありました。

LM ラーシュは共演するのが大好きなミュージシャンです。ボーランドのコンサートで初めて共演した時に、「彼